

## 5 歳児 さくらぐみ事例

「普通のお寿司ってさ、ビューンって回ってくるでしょ！」

—「子どもの声」を聴き流さずに、次の保育へ—

吉岡 良介

### ◆期のねらい

11 期：はっきする —仲間と価値や目標を共にしながら、一緒に活動をすすめていく—

### 1. 「子どもの声」から —保育のねらい、事前の環境構成と意図—

S が、赤い画用紙で×の形を作り、手裏剣のようにして持っていた。ふいに S は「俺、回転寿司作りてえ」と保育者に言い始めた。そして、画用紙を回しながら、「お寿司のせてえな」とお寿司を載せて回るイメージをしているようだった。

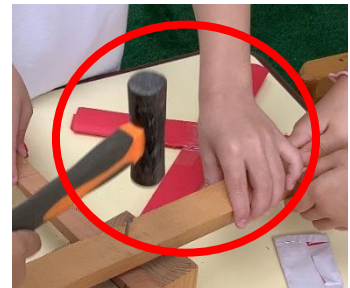
その姿を見た保育者は「のせてまわす？本当に回るお寿司を作りたいのかな？」と考えた。

そこで、保育者は「本当に動くの作ってみようよ」と提案し、木とトンカチ、釘を持ってきて、安全確保のためテラスの奥まった場所に子どもと移動した。

そして、S が画用紙で作っていた『×の形が回転するような形状』と似た形になるよう保育者が木を置いて見せると、「これいいね」と、子どもたちは道具を使って回転する仕掛け作りに取りかかった。

木が強く、釘がなかなか入っていかない様子だったが、交代で木を支えたり、トンカチで打ったりしながら友達と一緒に作っていった。

トンカチの音に引き寄せられるように別の遊びをしていた数人の子どもたちがやってきて、お寿司作りに加わった。g たちは「お寿司作ろう！」とトンカチを打っている隣の机で、好きなお寿司の話しながら、画用紙やセロハンテープを使い、『いくら』や『マグロ』など本物らしいお寿司づくりを始める。保育者もお寿司の話題に加わりながら、子どもたちの好きなお寿司が作れるように折り紙などの素材を増やしたり、素材が取りやすくなるようにカゴに仕分けたりしていった。I は「デザートとかもあるんだよね」とお寿司屋さんのサイドメニューの話題にもなっていった。



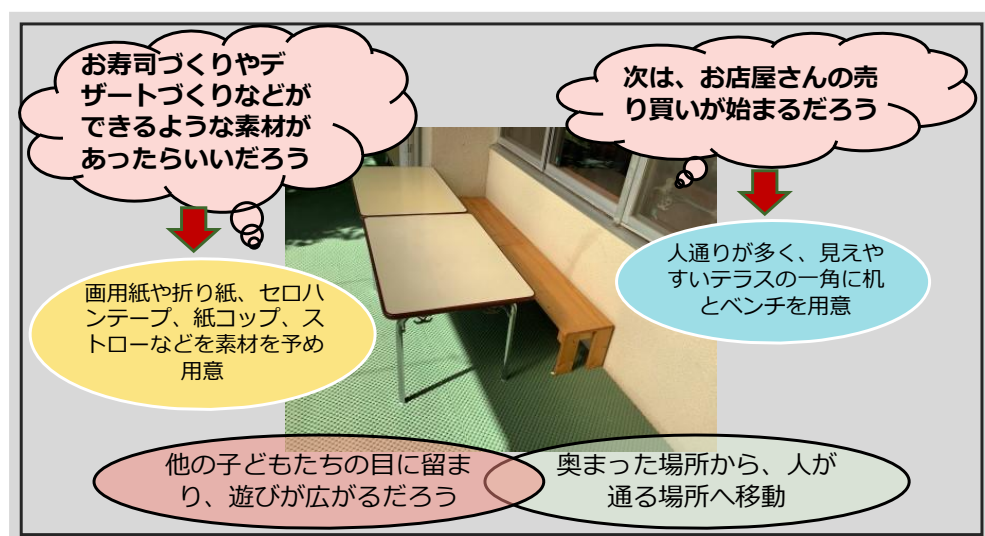
子どもたちの力で、なんとか1本の釘を打ち終え、回る仕掛けができあがった頃にこの日は、片付けになった。このとき、分散登園期間中だったため、クラスの半数の子どもたちは休み。そこで「もう1つのチームには内緒にしたい」と保育者と子どもたちで相談し、片付けの時に見つからない場所にこっそり閉まっておくことにし、次回登園してきた時に、回転寿司屋さんの続きをしようということになった。



## 2. 本日（9月7日）のねらい

友達とアイディアを出し合ったり、自分なりに試したりしながら遊びを進めていく。

## 3. 事前の環境構成



#### 4. 実際の子どもの姿から 【9月7日（火）】

「ジュースもあった方がよいね」

朝、集まった際の「なにしよう会」で、さっそく、お寿司屋さんの話題が子どもたちから出てきた。

「今日もお寿司屋さんしよう」と話す子どもたち。遊び始めるとすぐ、お寿司屋さんの材料や道具を準備していった。

お寿司だけでなく、「ジュースもあった方がよいね」「アイスもいいね」と言い、透明のコップに折り紙を入れ、様々な味のジュース作りが始まった。gは「ジュースがこぼれないようにフタを作るんだ」と言い、コップの上部に紙をぴっちり貼り、こぼれないよう工夫するなどして作っていった。

透明カップやストロー  
を事前に準備しておく



「バッタのお寿司もジュースもありますよ」

Kは、バッタを手に持ち、バッタが喋っているようにお客さんとしてやってきた。バッタが「食べられるお寿司はあるかな?」と話す。Iは、「バッタのお寿司もジュースもあるよ」と葉っぱを拾い集め、バッタのためのジュース作りをしていった。



いろいろな参加  
の仕方ができる

「お寿司作ってたんだ」

保育室に置いていた折り紙を使って、「お寿司作ってたんだ」と、iは1人離れた場所でお寿司作りをしていた。そこで、保育者はiに「広くするからお店の近くで作ろうよ」と言い、お店の机を1台増やした。すると、iがお店の方に来て、友達近くでお寿司作りを始めていった。



机を1台増やす

「お寿司ありますよー」

Sは、お店の看板を作ったり、チケットを配ろうと考えたりしている様子だったが、友達に相談しづらそうに、1人走り回った後、保育者にS「先生がチケット配ってよ」と言う。

そこで、保育者は「お店の近くでチケット配れるようにしてみようか」と、巧技台を移動し、Sがお店の近くでチケットを配れるような場所を作った。すると、Sは、友達近くで「お寿司ありますよー」とチケット配りを始めていった。



巧技台を移動する

「普通のお寿司ってさ、注文したらビューンって回ってくるでしょ」

その後、お客さんとして j がお店にやってくる。j は回る木を見て「普通のお寿司ってさ、注文したらビューンって回ってくるでしょ」と言った。保育者「確かに、新幹線みたいなのでシューッと流れてくるやつもあるよね…」と言いながらも、お寿司づくりを続ける。



(確かにあるよな、と保育者は心の中では思いつつ、その言葉は流していた)  
店員の g は「柵だ！寿司ってこれだけじゃないでしょ、シューってするやつもある」と、回転寿司屋にあるものへと新たなイメージを膨らませていく。



保育者は、j が言った言葉に対して「確かに、新幹線みたいなのでシューッと流れてくるやつもあるよね」と応えた。しかし、その時は他の子どもと話しながらお寿司を作っていたため、j と会話はしていたが、別の子とのお寿司作りに気持ちが向いていた。また、仕掛けづくりは難しいのではないかと、その瞬間に頭をよぎったため、お寿司作りを続けていった。

撮影していた副園長から「シューって言う子どもの言葉があったけれど、大事なところなのではないか。そこにどう応えていったら良いか？」という指摘があった。

保育者は、その指摘を受けて考えを改め、j や g の側に座り、保育者「さっき言ってたシューってやつ、ここで作れないかな？」と提案していくことにした。

「見てて！」

保育者の提案に、j や g は、お寿司が流れる仕組みを考え始めた。保育者はその側に来てお寿司が流れるような仕掛けなど、リアルな回転寿司屋のイメージを子どもたちから聴き取ろうとしていった。

(この時、保育者の頭の中では、机にダンボールを巻き付けて、ベルトコンベアのように手で回す仕組みはどうかと形状を考えていた。)

子どもたちからは、「ピッとタッチしたらお寿司流れてくるね」と回転寿司屋で見た体験を話したり、「見てて！」とフリスビーを投げるようにお皿を机の上で滑らせ、お寿司がお客さんへと届くようにすればどうかと考えたりしていった。

結局、アイデアは出てくるが、具体的な活動にはなっていらず、この日は片付けの時間になった。



## 5. 第1回カンファレンスを通しての保育者の気づき

### 第1回カンファレンスを通しての保育者の気づき

jがお客さんとしてやってきたことで、新たに「流れる」というイメージが加わったのでは？

近くで行われていた別の遊びと交流させれば、遊びが広がったのでは？

保育者の頭にある「寿司が回る」のイメージに固執してしまっていたのではないかな？

- ・ j の話を聞いた時、保育者の中で一瞬「仕掛け作りは難しいかもしれない」と頭をよぎったことで、j の声を流してしまっていた**保育者自身に気づく**
- ・ 動画を見返す中で、j の言葉を聞いた周りの子どもたちの表情や雰囲気から「よりリアルな回転寿司屋さんに近づきたい」と、「流す仕組み」へ関心が向いていく**子どもたちの様子**として捉え直す

## 6. 明日の保育に向けてー環境構成と意図ー

### 明日の保育に向けてー環境構成と意図ー

子どもたちの関心は「流す仕組みを考える」ことへと変化→軌道修正へ

●「何しよう会」を活用した意見交換

●多くの子どもが、様々なアイデアを考え出していくことの楽しさが感じられるように

「寿司を流す」ための大型の積み木や、雨樋、Bブロックなどを用意

道具はいつでも使えるよう、でも「内緒」を守れるよう配置

## 7. その後の子どもの姿 【9月9日（木）～13日（月）】

「坂道を作ったら良いんじゃない？」

9月9日（木）

登園後すぐにクラスで集まり、「なにしよう会」の際、jが言っていた言葉を用い、保育者から「あの時、シューって流すやつって言っていたけれど、どういうことだったのかな？」とjに問いかけた。

jの話聞いた後、他の子たちにもお寿司屋さんの「流れる仕組み」について相談していった。

すると、クラスの子たちからは、「坂道を作ったら良いんじゃない？」「電車みたいにしたらどう？」などと様々なアイデアが出てきた。



雨樋やBブロック  
を予め準備しておく

「こうやったら流れてくよ！」

相談後、実際に遊び始めると、大型積み木に、雨樋を立てかけ坂を作っていく子どもたち。『Bブロック（タイヤのついたブロック）』にお皿を載せ、I「こうやったら流れてくよ！」と言ったり、Mは「電車にお寿司くっつけたら落ちないじゃん」とお皿が落ちないように何度も試したりしながら、坂道を滑らせてお寿司が流れていく方法を考えていった。



保育者は、子どもたちが様々な方法で試していく様子を側で見ながら、いろいろな子のアイデアが形になるように援助していった。

「お寿司流れていくから、途中で取ってね」

gやhは、『タイヤがついたブロック』は使わず、直接、雨樋にお皿を載せ、お寿司を流す方法を考えていった。坂道を緩やかにしたり、お皿を置く角度を変えたりして何度も試していくことで、お皿がコロコロとゆっくり流れ落ちていく方法を見つけていった。



hは「お寿司流れていくから、途中で取ってね」とお客さんと呼び、お寿司をとってもらい、やりとりを楽しむようになっていった。保育者は「どうやって流れるようになったの？」と構造を聞いたり、お客さんになって、子どもたちが考えた方法で流れてくるお寿司を受け取って食べたりして、やりとりをしていった。



「ラーメンもあるから食べてね！」

9月13日(月)

この日から一斉登園が始まり、別のチームだった子たちがいいよ登園してきた。朝の「なにしよう会」で内緒にしていたお寿司屋さんを紹介した後、お寿司屋さんが開店した。別チームだった子たちは、お寿司屋さんができていることに驚いていたが、お客さんになって売り買いを楽しんだり、お店の店員さんになったりして遊ぶことを楽しんでいった。



毛糸や画用紙など、  
素材を増やす

別チームだったLは、「お寿司屋さんってラーメンもあったよね」と、毛糸や折り紙を使って、ラーメン作りをし、回る木の上に載せ、L「ラーメンもあるから食べてね！」と、これまでになかったお店のメニューが増えていった。

様々な子たちが遊びに加わっていくことで、リアルな回転寿司屋さんにあるものの想像がさらに膨らんでいった。

## 8. 第2回カンファレンスを終えての考察

### 第2回カンファレンスを終えての考察

子どもの声を聞き流していた  
保育者自身を自覚

これまでの保育を振り返り、自分自身の癖を認識  
また、躊躇や他児への注目などがそのきっかけであることに気づき、次の保育へ活かすためのヒントが得られた

子どもに改めて聞いてみよう  
と保育を軌道修正

「流す仕組み」を様々な方法で行おうと、子どもたちが自ら試行錯誤し、新たな発想によるリアルな回転寿司屋さんの追求へと楽しみを広げることにつながっていった

jの「遊びの転換点になるような声」への気づき

遊びの転換点や起点になる声を聴き取ることが、私たちが目指す「子どもの声」から創り出す保育の大切なポイントの1つであるということを実感

自分の保育を問い直し、遊びの質が変わるような瞬間や、子どもが考えているおもしろさを「子どもの声」として捉え、次の保育を考えていくことが重要だと感じた